

## <論文>被服心理学の動向を通しての一考察

著者	高岡 朋子
雑誌名	北海道浅井学園大学生涯学習システム学部研究紀要
巻	3
ページ	27-34
発行年	2003-03-20
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00000636/">http://id.nii.ac.jp/1136/00000636/</a>

## 被服心理学の動向を通しての一考察

### A View on Clothing Psychology and its Trends

高 岡 朋 子

Tomoko TAKAOKA

#### I はじめに

現在、教育改革や18歳人口減少にともなう大学進学者数の低下等に対応して、多くの大学・短期大学では、学部学科の改組転換が計画され実施されている。

全国大学一覧（文部科学省高等教育局監修）から表1に示すように、1993年には国公立私学の大学の家政学部は34、そして家政系と思われる栄養学、生活科学を含めると52あった。2001年には家政学部は21に減少し、家政系を改称した生活科学部13、生活環境学部2に増加し、また人間生活学部、人間文化学部、人間環境学部、人間科学部など冠に人間がつく学部が29になっている。

もとは家政学部であったものが改組転換をし、学部学科名を改称する。あるいは短期大学を廃止し大学に昇格するなど、家政学部は改組転換の最先鋒に位置し、なんらかの変更を余儀なくされ、その先端に被服学が位置しているように思える。

とくにもものづくりから始まった被服教育は、消費生活の文化的流れの中でその必要性が薄れているのにも関わらず、このものづくりの古いイメージが払拭されず、高校生には人気がなく志望者が減少してきている。このように志望者が少ない学部学科を廃止し、学生が集まる名称の学部学科に変更している現状を考えると、被服学を取り巻く環境は今後ますます変化していくと思われる。

被服学、衣服学はつくる、縫うだけではなく、他の学問領域にまたがる学際学問であることは承知の事実である。被服に携わる者として、他人がいいままで培い、築き上げたこの被服学の歴史、知識、技術の発達を後生に伝えていく責任があるのではないだろうか。

このような視点から被服心理学の現状を通して、被服学の今後の進むべき方向を探ることを目的に、被服心理学部会員に科目に対する調査を行なった。その結果をもとに被服心理学、被服学の今後について考察した結果を私見として述べる。

#### II 被服心理学の現在までの動向

被服心理学は被服の購買、着用、廃棄に至るまでの被服に係わる人間行動を扱う学問である。

従って、その研究は人文、社会科学に位置する。被服の素材や縫製など被服の物として扱う研究は自然科学に位置づけられ、我が国では被服の自然科学的側面での研究は早期から始められていたのに対し、被服の人文、社会科学的研究、すなわち被服心理学が取り扱う研究分野は

表1 家政学系学部数の推移

	国立	公立	私立
1982	2	7	39
1983	2	7	39
1984	2	7	39
1985	2	7	39
1986	2	8	39
1987	2	8	39
1988	2	8	39
1989	2	8	39
1990	2	8	39
1991	2	8	39
1992	2	9	40
1993	2	9	41

家政学将来構想1994より抜粋

表1-1 家政系学部数の推移

	1993		1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001
家政学部	34		26	26	24	23	23	21	21
文家政学部	1		1	1	1				
生活科学部	6		11	11	10	12	11	13	13
生活環境学部			2	2	2	2	2	2	2
服装学部						1	1	1	
人間生活学部	1		1	1	2	2	2	2	2
人間科学部	7		8	8	8	8	8	9	12
人間文化学部			1	1	2	4	5	8	8
人間環境学部			1	1	2	2	3	4	7

全国大学一覧より作成

立ち遅れていた。

アメリカの家政学研究者が心理学，社会学，社会心理学の学際領域を勉強し，被服学と融合させ被服心理学を展開させてきたのは，戦後すぐのことである。日本では，日本繊維機械学会の被服生産技術研究会の一分科会として，被服心理学研究会が発足したのは1980年である。年6回の例会を開催し，被服行動に関しての理論的な研究方法などを展開してきた。その後1984年には東京でも年6回の例会を開催し，その年度に行った研究を中心に3月末には分科会の研究発表会，家政学会，繊維製品消費科学会などの年次大会で研究発表をしてきている。<sup>1)2)</sup>

また1988年には，被服心理学を学ぶ人のためのテキストが繊維機会学会から出版されている。このテキストは機械学会分科会で運営委員として被服心理学の指導的役割をされていた当時奈良女子大の中川早苗，鳴門教育大学の藤原康晴，共立女子大学小林茂雄，当時梅花短期大学の家本修の諸先生方が出筆され，現在では被服心理を担当している先生方により，使用されている。

さらにこの研究分科会が母体となって、日本家政学会に被服心理学部会が1984年に設立され、毎年例会および夏季セミナーを開催してきている。その内容は被服心理学研究の基礎的な研究成果から、応用分野にいたるまで多岐にわたるもので、この頃より被服心理学の報文として日本家政学会誌にも掲載されるようになった。

学問を発展させるためには、研究の成果である報文が数多く発表され、紙面上での活発な討論が不可欠になる。1988年、89年の家政学会誌に発表された被服心理の論文は、4報あったが<sup>3)</sup>、2001年の家政学会誌に掲載された論文のうち被服心理学に関するものはわずかに1報だけである。勿論論文の掲載は家政学会誌のみではなく、繊維製品消費科学会誌、繊維機会学会誌などもあり、一概に家政学会誌のみで被服心理系の論文が少なくなったとは言えないが、被服心理学の論文が減少した理由として、日本繊維機械学会の分科会主催の研究会が廃止されたこと、この頃と時を前後にして、大学・短大の改組転換が始まり、大学を取り巻く環境が変化してきたことがあげられる。

表2 1988～2001年の日本家政学会誌に掲載された被服学関係論文数の推移

		論文	ノート	資料	合計
1988	vol. 39	34	2	8	44
1989	vol. 40	20	3	7	30
1990	vol. 41	27	1	8	36
1991	vol. 42	20	2	0	22
1992	vol. 43	23	1	3	27
1993	vol. 44	19	4	3	26
1994	vol. 45	19	2	2	22
1995	vol. 46	22	5	0	27
1996	vol. 47	18	3	2	23
1997	vol. 48	19	2	0	21
1998	vol. 49	18	2	1	21
1999	vol. 50	16	0	3	19
2000	vol. 51	16	2	1	19
2001	vol. 52	20	1	1	22

### Ⅲ 部会員の教科目現状

平成14年3月現在の被服心理学部会員は127名である。この部会員全員に被服心理学に対する現状を把握し、今後の被服心理学の動向を考える目的でアンケート調査を実施した。回収率40.9%で52件（内訳は大学22名、短大30名）である。

所属する学科名は、生活文化や生活環境などの生活系の学部学科が多く、回答中の32校が生活系の学科で、家政系学部学科が7校であった。所属学部学科の中には人間文化学部や人間社会学部の名称もあり、家政学部の減少と「人間」を冠にした学科の増加が部会員の中にも現れていた。

つぎに部会員の担当している被服関連の教科目数をみると、多い人で7教科、平均的には4

～5科目が最も多く、教科目名として出現率の高い科目は「被服構成実習」「アパレル造形実習」等の構成学関連の実習科目である。つぎに多いのが衣生活論、服装史、被服心理学などの講義科目であり、被服系の教員として、実習・演習科目と講義科目の教科目を担当していることがわかる。このように一人の教員の複数教科科目の担当は学生数の減少に伴い、教員数も減少していることを物語っている。

#### Ⅳ 被服心理学の講義方法について

部会員に被服心理学あるいは、それに類した科目の開講の有無を調査した結果を表3に示す。被服心理学を開講しているが13名、自分が担当している科目の中で被服心理学に触れているが27名で、開講している人数の倍の人がなんらかの形で被服心理学に触れている。

被服心理学は講義科目として開講しているところがほとんどであるが、どのような授業形態で展開しているかを「いつもしている 時々している 全くしない」の3段階評価で回答してもらった結果を表4に示す。

表3 被服心理学開講の有無

項	目	人数 (%)
開講している		13 ( 25.5)
開講する予定がある		2 ( 3.9)
開講していない		9 ( 17.6)
自分がもっている科目の中で被服心理学に触れている		27 ( 52.9)
	計	51 (100.0)

表4 授業の展開方法についての平均評点 (3段階評価)

項	目	大 学	短 大	全 体
テキストにそって説明し解説を加えた授業をしている		1.91	1.46	1.67
OHP やスライドを使った授業をしている		1.73	1.92	1.83
写真やスライドを使った授業をしている		1.73	1.92	1.83
図や表を多く用いている		2.18	2.07	2.13
社会心理のテキストを多く参考にして授業をしている		1.91	1.69	1.78
授業の中でビデオを使ったことがある		1.55	1.77	1.67
新しい論文の紹介を心掛けている		1.91	1.62	1.75
パワーポイントを使って授業をしている		1.54	1.23	1.38
学部学科の特徴を生かした、講義を展開している		2.36	2.38	2.38

大学、短大ともに一番高いのが「学部学科の特徴を生かした講義を展開している」で、次いで「図や表を多く用いている」であり、3番目に高い評価のあったものが「OHP やスライド、写真などを使って授業をしている」であった。

「テキストにそって説明をし、解説を加えた授業をしている」「新しい論文の紹介を心掛け

ている」の項目は大学のほうがやや高く、短期大学では「図や表を多く用い」、「OHP やスライド、写真などを使って」の項目が高かった。大学は学問的な講義形式を展開しているように見受けられ、短期大学ではビジュアル的な授業展開をする傾向にあり、授業担当者は学生の資質に合わせて、工夫を凝らしていることが推察できる。

なお被服心理学を開講している大学の多くは、機械学会編の「被服心理学」をテキストとして使用していた。最近の学会等での研究発表会は、従来の OHP による発表形式が、パソコンによる発表形式に切り替わってくる傾向にあるため、授業時でのパソコン使用の有無を聞いたところ、「パワーポイントを使って授業をしている」は1.38と、ほとんど使用していない。しかし、他教科目や他学会等では若手教員による使用が増えており、今後黒板の代わりに、パワーポイント等を使用しての授業展開が新たな課題になると思われる。

## V 被服心理学の講義実態

昨年の被服学関係部会合同セミナーにおいて、実施した「被服学の授業に関する学生対象のアンケート」結果<sup>4)</sup>（表5）によると、学部被服学系で学んだことのある科目としては、色彩学、被服構成、服装史、被服材料学が上位に位置し、これらの科目は多くの被服系の学部で開講されているのに対し、被服心理は49.2%で14教科目中の11番目に位置し、およそ半数の学部でしか被服心理に触れていないことがわかる。

つぎに興味をもった内容の科目として上げられていたのが、色彩学、被服構成、染色加工、

表5 大学・短期大学の被服学に関連した授業内容  
(講義、演習、実験、実習を含む) にいて (複数回答) %

学部被服学系	(1) 学んだことのある 内容の番号をかいて 下さい		(2) 興味を持った内容 の番号を書いて下さ い		(3) 興味を持てなかつ た内容の番号をか いて下さい		(4) 自分の生活に役立 つ知識や技能を得ら れた内容の番号をか いて下さい	
①衣生活論, 概論	⑨	60.7		5.1		17.1		8.8
②色彩学	②	84.8	①	46.0		6.5		20.1
③被服構成アパレル企画	③	84.5	②	40.9		6.2		21.0
④アパレルデザイン	⑩	55.9	④	24.9		4.2		7.4
⑤服装史, 服飾美学	⑥	70.7	⑥	21.9		17.3		7.9
⑥被服心理	⑪	49.2	⑧	18.2		3.2		10.2
⑦被服衛生	④	74.4		15.9		18.0		21.9
⑧被服材料	①	86.4	⑤	22.4		16.2		22.6
⑨テキスタイルデザイン		31.6		9.7		2.5		4.4
⑩染色加工	⑦	64.9	③	25.6		5.3		10.2
⑪被服整理, 被服管理	⑤	71.1		17.3		9.7		24.7
⑫被服の流通, 消費	⑧	63.3	⑥	21.9		9.9		15.0
⑬リサイクル, 環境問題		28.9		12.2		3.0		7.9
⑭その他		10.6		2.5		1.4		2.8

'01被服学関係部会合同夏季セミナー「衣生活を支える“被服学”」から抜粋

アパレルデザインの順で、被服心理は14教科目中の8番目に位置していた。わずかであるが、興味をもった内容の方の順位があがっている。

そこで今回、被服心理学の講義実態を部会員に対して、5段階評価で聞いた学生の反応を表6に示すと、全体的には学生の反応は高い傾向にあった。中でも一番高い評価があった項目が「生活の役にたつ科目であると思っている」は4.14、つぎには「学生は興味をもって学んでいると思う」4.08であり、大学の教員のほうが4.13とわずかではあるが、高く評価していた。学生は被服心理に対して興味をもって受講している、と思っている教師側の姿が浮かび上がって来る。

昨年度のアンケート結果である興味を持った内容の科目として、あげられた被服心理の順位は8位であり、今回の結果と矛盾している。興味をもって受講しているという教師側の一方的な思いこみもとれるが、被服心理を開講している、あるいは授業の中で触れている大学が少なかったことが、そのまま興味の持たれ方に影響を与え、順位が低くなつたとも考えられる。

今まで被服心理に携わってきた者の責務として、以前<sup>5)</sup>から提言されていることであるが、講義の中で被服心理に触れる機会を多く持つ、あるいは講義としてカリキュラムを組むなど、被服心理に対する認識度を上げ、興味を持って貰う努力が必要なのではと考える。

つぎに教師側が被服心理学を、どのように捉えているのかの質問に対する結果を表7に示すと、「社会情勢を考えると被服心理学は必要な科目である」が4.49と一番高い評価があった。つぎに高い評価があつたものは「教師自身が興味をもって教えられる科目である」4.41、「被

表6 被服心理学をどのように考えるか (5段階評価)

項 目	大 学	短 大	全 体
教師自身が興味をもって教えられる科目である	4.26	4.50	4.41
衣服学の教科目として学問的で重要な科目である	4.13	4.36	4.27
学生には難しい科目だと思う	2.93	2.95	2.95
生活の役に立つ科目である	4.20	4.14	4.17
新しい情報が入った(研究結果)テキストがあったらよいと思う	4.07	4.36	4.24
被服心理学を講義中心の科目から演習科目(調査方法などの)にするとよいと思う	3.60	3.73	3.70
被服心理学分野の研究が足りないと思う	3.73	3.68	3.57
研究は調査手法ではなく、実験的な手法を用いたほうがよいと思う	3.33	3.73	3.70
社会情勢を考えると被服心理学は必要な科目である	4.33	4.59	4.49

表7 学生の授業に対する反応 (5段階評価)

項 目	大 学	短 大	全 体
被服心理学は生活に役立つ科目であると思っている	4.07	4.19	4.14
被服心理学は重要な科目であると思っている	4.00	3.81	3.89
被服心理学を学生は興味をもって学んでいると思う	4.13	4.05	4.08
被服心理学を難しい講義だと感じている	2.40	2.95	2.72
被服心理学に対して関心が薄いと思う	1.87	2.00	1.94

服学の教科目として学問的で重要な科目である」4.27と続く。一番高い評価があった「社会情勢を考えると」の項目での社会情勢とは、被服学を取り巻く社会環境の変化、生活環境の変化を意図している。すなわち一頃は「ものづくり」としての被服教育であったものが、現在では作らずに既製服を購入、着用するという生活様式の変化や環境の変化に伴い、被服着用の意味を問う教科目として被服心理学が必要である、という認識のもとに立てた項目である。今回の調査結果から被服心理学は、必要な科目であり、教師自身が興味を持って教えられ、学問的で重要な科目であると思っていることが伺える。

’01年の被服心理学部会でのアンケート調査の結果から、新しいテキストをつくることが承認されているが、今年も引き続き「新しい情報が入ったテキスト」としてテキストの作成にかんする項目をいれてみたところ、4.24とやや思っている方にある。その理由として被服心理学を開講している先生方が使用している、日本繊維機会学会編のテキストは、10年前に作成されたために、参考になっている論文の年度が多少古くなっている。また対象者を短大にしぼったテキストがないことも、一因になっていると考えられる。

## VI 今後の展望

「被服心理学」は被服系の専門科目であるが、より教養的な要素がはいっているために、大学内の環境の変化に対応できる科目と思われる。すなわち学部学科が変更するなどの改組転換があった場合にも、「被服心理学」はそのまま開講できる科目であろうと考え、今回の調査の最後に、「被服心理学」を生かせる分野として、7項目の中より○印をつけて貰った。

結果を表8に示すと、「衣生活関連」「高齢者関連」が同数で、つぎに「健康生活関連」としていた。「衣生活関連」での被服心理学は今までの延長上にあるため、生かせる分野としては考えやすい。今回の部会員の調査結果から、教育学部「生活環境学科」と、短期大学「生活科学科」では被服心理学を科目として開講していた。

また「高齢者関連」の例としては、人間文

表8 被服心理学が生かせる分野（複数回答）

分 野	人 数
衣生活関連	15
福祉関連	9
健康生活関連	13
環境生活関連	7
精神生活	5
高齢者関連	15
計	64

化学部「生活福祉文化学科」で、被服心理学に触れた講義をされている。高齢者のファッション問題として小林<sup>5)</sup>が被服学研究の一つの方向として提言されているが、高齢者関連としては介護福祉士の資格取得に現在、生活学概論、生活学実習が取得科目として設定されていることもあり、被服心理学としては今後の動向に期待したいところである。

つぎに「健康生活関連」の実例として、筆者は短期大学服飾美術学科から「生涯学習システム学部健康プランニング学科」に所属が変更になったが、この学科の生活関連領域科目の中に、健康な生活を送るための被服という位置づけで、「被服行動と心理」という科目をたてた。



他に部会員の中には人間社会学部「社会情報学科」で被服心理学を科目として持っている例もあった。このような例からも「被服心理学」は家政学、衣服学という枠にこだわらなければ、他学科他学部に移行可能な科目と言える。

現在、生活に関する科目いわゆる衣食住関連の科目は家政学部・家政学科・生活系で多く開講されているが、被服系の科目が学生数の減少により、縮小され担当者も減少し、今被服学という学問領域の再構築が望まれている時期と考えられる。このような時、被服系の科目は「被服心理学」のみならず、家政学、被服学という枠組みに固執することなく、他学部、他学科へ移行し、科目として学問として発展していくことが可能であり、必要なのではないかと考える。

そこで私見であるが、「被服心理学」が他学部、他学科に移行した経緯を考え、生活関連の家政学という学問を他学部、他学科に教養科目としてたてるという見解を提案したい。

それは、被服学を含めた生活関連科目（衣食住科目）は、人が生活をしていく上で必要な科学的な知識、技術を習得する科目であるからである。

とくに生活資材が産業化し、生活そのものが経済行為の中で行われる現代では、生産者側から提供される情報をそのまま受け入れるのではなく、適正な科学的知識のもとに選択することが求められている<sup>6)</sup>。こうした意味でも生活関連科目は、自立した社会人になるための「教養科目・生活必修科目」として、どんな学部・学科にあっても必要な科目なのではないだろうか。一般教養科目は平成3年より廃止され、それに変わる科目は各大学独自で設立出来るようになっているが、外国語が教養科目としてほとんどの大学でカリキュラム化されているように、生活関連科目を教養科目としてカリキュラム化することができたならば、多くの人達に生活に根差した学問の大切さを理解してもらえないのではないかと考える。

と同時に学生に魅力的な「被服教育」をするための研究会や意見の交換会等、被服領域以外の有識者も交えての議論が早急に開かれることを望んでいる。

#### 付記

この報文は平成14年8月に被服衛生学部会・被服心理学部会合同セミナーにおいて発表したものに、一部加筆訂正を加えたものである。

#### 参考文献

- 1) 藤原康晴：被服心理学研究分科会大阪例会の歩み，繊維機会学会誌，Vol. 45. No. 11, 1992.
- 2) 小林茂雄：被服心理学研究分科会東京例会の歩み，繊維機械学会，Vol. 45. No. 11, 1992.
- 3) 日本家政学会編：家政学会誌による家政学研究の推移・動向（1988～1997）日本家政学会誌 Vol. 49. No. 5, 1998.
- 4) 猪又美栄子：被服学の授業に関する学生対象アンケート結果から，'01被服学関係部会合同夏季セミナー編，2001.
- 5) 小林茂雄：被服学の教育と研究についての提言，繊維製品消費科学誌，Vol. 36. No. 6, 1995.
- 6) 田村照子：生活技術と家庭科教育Ⅱ，日本家政学会誌，Vol. 47. No. 10, 1996.